

新約聖書の中の祈り 第13回

□「新約聖書の中の祈り」のアウトライン

1. イエスの祈り
2. 福音書における他の祈り
3. 使徒の働きにおける祈り
4. 書簡における祈り

□「使徒の働きにおける祈り」・・・「使徒の働き」の中から、27の祈りの事例を見る。
本日は、第15から第17の、3つの事例。補足にて、聖霊を受けることと異言の関係

15. 使 10:9 翌日、この人たちが旅を続けて、町の近くまで来たころ、ペテロは祈るために屋上に上った。昼の十二時（直訳「第6時」）ごろであった。

(1) 10:9

- ① この人たち＝ローマ軍の百人隊長で神を求めるコルネリウスの使いの者たち。カイサリアを出発してから2日目、ヤッファの町に近づいていた。到着まであと3時間くらい。ペテロはひとりになって祈るために、屋上に上った。
- ② 第6時、ペテロが祈りのために定めていた時刻であった。当時のユダヤ人は、日に3度、時刻を決めて祈るのが習慣であった。ペテロもその一般的な習慣にしたがって、正午の時刻の祈りに向かった。
- ③ 祈りの内容については、特に記されていない。ペテロが日常的にする定型的な祈りであったろう。

(2) 10:10～16

- ① 神はペテロに空腹を感じさせ、ある幻を見せた。
- ② その幻とは・・・天が開き、大きな敷布のような入れ物が、四隅をつるされて地上に降りて来た。その中には、あらゆる四つ足の動物、地を這うもの、空の鳥がいた。（モーセの律法上、食べてよい物も、いけない物も、いっしょになっていた）
- ③ そのとき、天から神の声が響いた。「ペテロよ、立ち上がり、屠って食べなさい」。
- ④ ペテロは答えた。「主よ、そんなことはできません。私はまだ一度も、きよくない物や汚れた物は食べたことはありません。」
- ⑤ もう一度天から神の声が響いた。「神がきよめた物を、あなたがきよくないと言ってはならない」
- ⑥ このようなことが3回あって、その入れ物は天に引き上げられた。

(3) 10:17~23 ペテロが幻について思い巡らしていると、コルネリウスからの使いの者たちが到着した。御霊がペテロに語りかけて、彼の決断を促した。ペテロは、彼らを迎え入れて泊ませた。

16. 使 10:30~31 すると、コルネリウスが言った。「四日前のこの時刻に、私が家で午後三時の祈りをしていますと、なんと、輝いた衣を着た人が私の前に立って、こう言いました。「コルネリウス。あなたの祈りは聞き入れられ、あなたの施しは神の前に覚えられています。

(1) 経緯 10:23~33

① 23節後半 翌日、コルネリウスの使いの者たちといっしょに、ペテロは出発。ヤッファにいたユダヤ人信者数人も同行した。

② 24~29節 次の日の午後3時頃、カイサリアに到着。コルネリウスの出迎え

③ 30~33節 ペテロを招くに至った出来事の説明

(2) 30節 「私が家で午後三時の祈りをしていますと」・・・直訳すると「私は守っていた、第9時の祈りを、私の家で」→ コルネリウスが、毎日、一定の時間を定めて、祈る習慣を持っていたことを示す。

(3) 30~33節 天使が現れてコルネリウスにペテロを招くように告げたこと、その告知に従い使いの者を送ったことを説明

① 10:3~8に記された出来事を、コルネリウスが回想してペテロに説明

② 31節、「あなたの祈りは聞き入れられた」、その祈りとは、使徒10:2で記された、コルネリウスが普段から切に祈っていたことを指す。祈りの内容は、具体的には記されていないが、祈りに対する答えとの関係から推測されるのは、「イスラエルの神のことをもっと知りたい」という願い。

(4) この願いに対する答え：神は、天使を通して、ペテロを招くようにコルネリウスに告げた。合わせて、その2日後に、神は、ペテロに幻を見せた。

① ユダヤ人であるペテロに、異邦人のコルネリウスを訪問させるためには、異邦人の家を訪問することは汚れを受けるので許されない、とするユダヤ人の感覚を、ペテロから除かねばならない。

② 使10:9でペテロに見せられた天からの幻は、その感覚を除くためであった。

③ そのことをペテロが理解したことは、10:23でペテロが使いの者たちを迎え入れて泊ませたこと、そして10:28でペテロがコルネリウスに語った、次のことばから、明確にわかる。・・・「ご存じのとおり、ユダヤ人には、外国人と交わったり、外国人を訪問したりすることは許されません。ところが、神は私に、どんな人のことも、きよくない者であるとか、汚れた者であるとか言ってはならないことを、示してくださいました。それで、お招きを受けたとき、ためらうことなく来たのです。」

(5) 33～48節

- ① 33節 「今、私たちはみな、主があなたにお命じになったすべてのことを伺おうとして、神の御前に出ています。」
- ② 34～43節 ペテロの証言
- ③ 44～46節 コルネリウスたち、みことばを聞いていたすべての人々に、聖霊が下った。彼らが異言を語り、神を賛美するのを、ペテロたちは聞いた。
- ④ 47～48節 洗礼

17. 使 11:5 私はヤッファで祈っていました。すると、夢心地になり、幻を見ました。大きな敷布のような入れ物が、四隅をつり下げられ、天から降りて来て、私のところに届いたのです。

(1) 経緯 使徒 11:1～4

- ① カイサリアに使徒ペテロが出向き、異邦人たちも神のことばを受け入れたと、エルサレムにいた他の使徒たちやユダヤ人信者たちの耳に入った。
- ② エルサレムに帰還したペテロに対し、「あなたは割礼を受けていない者たちのところに行って、彼らと一緒に食事をした」と非難するユダヤ人信者たちがいた。
- ③ そこで、ペテロは事の次第を順序立てて説明した。

(2) ペテロの説明 使徒 11:5～17

- ① 5～10節、ペテロは、使 10:9～16 に記録された出来事を回想している。「ヤッファで祈っていました」というのは、ヤッファに滞在中に、いつものとおり日々の定まった時間の祈りをささげていました、ということ。
- ② 11～12節 ペテロは、ヤッファで祈っていたときに見た幻を通して、神から、異邦人を汚れたものとして避けるようなことは、もはやしてはならないと示され、コルネリウスの使いの者たちの来訪と招きを受け入れた、と語った。
- ③ 13～14節 ペテロを招くに至った経緯について説明を受けたことを回想している。使徒 10:30～32 の記事の繰り返しであるが、コルネリウスによる説明をより詳しく伝えている。14節「その人（ペテロ）が、あなた（コルネリウス）とあなたの家の者たち全員を救うことばを、あなたに話してくれます」
- ④ 15～17節 ペテロが話し始めると、コルネリウスたちに聖霊が下ったことの証言。「私が話し始めると、聖霊が初めに私たち（ユダヤ人信者）の上を下ったのと同じように、彼らの上を下ったのです。・・・ですから、神が、私たちが主イエス・キリストを信じたときに私たちに下さったのと同じ賜物を、彼らにもお授けになったのなら、どうして私などが、神がなさることを妨げることができるでしょうか。」

(3) ユダヤ人信者たちの反応 使徒 11:18

- ① 人々はこれを聞いて沈黙した。
 - ② そして、「それでは神は、いのちに至る悔い改めを異邦人にもお与えになったのだ」と言って
 - ③ 神をほめたたえた。
- (4) 日々の祈りの重要性
- ① 異邦人の救いを計画したのは、神
 - ② 異邦人の救いの門を開いたのは、ペテロ
 - ③ 神とペテロの働きを実行に動かしたのは、祈り
 - ④ コルネリウスは祈りにより、神を求め続けた
 - ⑤ ペテロは具体的・直接的に異邦人の救いを祈ったわけでないが、ヤッファで日課としての祈りの習慣を守る中で、霊的に整えられ、神のみこころを受け取ることができた。

聖霊を受けることと異言のしるしとの関係について、次に補足として扱う。

□【補足】「聖霊を受けた」ときの異言のしるしについて

1. 使 8:18 には、「使徒たちが手を置くことで御霊が与えられるのを見た」とあるように、サマリア人の信者たちが聖霊を受けたときに、目に見える、ある特別な状況が起きていた。
 - (1) その特別な状況とは、ここには記述されていないが、異言（いげん）である。
 - ① このときを含めて 3 回、御霊が与えられたときに目に見える現象が起きていて、ほかの 2 回はいずれも異言があったことを記録している。
 - ② 3 回目、使 10:45~46、使徒ペテロに同行していたユダヤ人信者たちは、異邦人であるコルネリウスたちが異言を話し、神を賛美するのを聞いて、【異邦人も聖霊を受けた】と判定した。
 - (2) 異言とは、原文では「舌」。聖霊の賜物のひとつで、本人が知らない他国のことばや天使のことばで語ること。
2. 1 回目は、使 2 章。ペテロはじめイエスをメシアとして信じるユダヤ人信者たちに御霊が与えられた。彼らは聖霊に満たされ、他国のことばで語った。
 - (1) 使 2:4 「すると皆が聖霊に満たされ、御霊が語らせるままに、他国のいろいろなことばで話し始めた」
 - (2) それを見た人の中には、使 2:13 『「彼らは新しいぶどう酒に酔っているのだ』と言って、嘲る者たちもいた。』
 - (3) 大方の反応は驚き、使 2:11 「私たちのいろいろな国ことばで神の大きなみわざを語るのを聞こうとは」とある。神の大きなみわざとは、イエスの復活であろう。このあと、ペテロは異言ではなく、自分のことばで、メッセージを語った（使 2:

- 14～36)、その中心の内容は、イエスの復活である。使 2 : 32 「神はこのイエスをよみがえらせた。私たちはみな、そのことの証人です。」
3. 2 回目は、使 8 : 17～18、サマリア人の信者たちに。使徒ペテロとヨハネが彼らの上に手を置くと、彼らは聖霊を受けた。それは 18 節にあるように、それが起きたことを目に見える形で認識できるものであった。具体的にそれを記した記事はない。
 4. 3 回目は、使 10 : 44～48、異邦人信者たちに
 - (1) コルネリウスと彼の親族や友人たち (20 節) は、神のことばを聞いて信じた、その瞬間に聖霊を受けた。
 - (2) ペテロと彼に同行していたユダヤ人信者たちは、異邦人にも聖霊の賜物が注がれたことに驚いた。
 - (3) 46 節「彼らが異言を語り、神を賛美するのを聞いたからである」
 5. 3 回ともペテロが関係している。ペテロに、門を開く鍵が委ねられていたからである。
 - (1) マタイ 16 : 19 「天の御国の鍵」
 - (2) 当時のユダヤ人の認識では、人類は 3 つのグループに分けられる。ユダヤ人、サマリア人 (ユダヤ人と異邦人との混血の民族、モーセ五書を聖典とするが正しい理解はしていなかった)、そして異邦人 (参照、マタイ 10 : 5～6)。
 - (3) この区分のとおり、まずユダヤ人、そしてサマリア人、そして異邦人にと、聖霊が与えられた。
 - (4) 最初のユダヤ人のときに異言の賜物が現れたこと、そしてサマリア人と異邦人のときも異言の賜物が現れたことで、神はユダヤ人と同じく、サマリア人にも異邦人にも救いを与えてくださったことが、目に見える形、耳に聞こえる形で明らかに示された。これは神がなされたことであるという認識を、ユダヤ人信者たちが持つことができた。
 - (5) この門はいったん開かれると、閉じることはない。その後は、民族を問わず、信者は信じた瞬間に、聖霊を受ける (I コリ 12 : 13)。そして、もはや、異言の賜物をもって、聖霊が下ったことを証明する必要はない。
 - (6) 異言の賜物は、他国のことばで語ること。福音がユダヤ人に対してだけでなく、すべての国の人々に向けて語られるべきことを示している。

結論：聖霊を受けることと異言を語ることがセットであるのは、ユダヤ人たち、サマリア人たち、そして異邦人たちに初めて聖霊が与えられたときに限定される。

それは、人類の 3 つの区分の人々に聖霊が等しく与えられることを示す、神による宣言。

その後、すべての信者は、信じた時に聖霊を受ける。

そのときに異言のしるしを伴う必要は、もはや、ない。

□【参考資料】御霊の賜物と「異言」（出典：MBS150 The Rules of prayer, P.7-8）

本稿は、フルクテンバウム博士の「異言の祈り」に関する解説を参考に、コリント人への手紙第一の12章から14章までをまとめたものです。文責は清水誠一にあります。

1. I コリ 12：1～31a 御霊の賜物について

(1) 背景：コリントの教会において、異言や預言の誤用が問題になっていた。特に異言は、集会参加者たちが一斉に語り出すと、誰も理解できない発声が響き合うだけ。これに対して、「イエスは、のろわれよ」と言っているのかもしれない、異言は禁止するべきではないか、といった意見も出ていたようである。

(2) 1～3節 そこで、パウロは、御霊の賜物について、教えることとした。まず。冒頭で、異言に対して不安をいただく必要はないことを言う。「神の御霊によって語る者はだれも『イエスは、のろわれよ』と言うことはできない。聖霊によるのではありません、だれも『イエスは主です』と言うことはできない。」→ 異言を禁止するべきかどうかについての最終的結論は、12：40「異言を禁じてはなりません」

(3) 4～8節 御霊の賜物についての総括的説明

- ① 4節 賜物はひとつだけでなく、いろいろある。与える方は、御霊である。それゆえ、「御霊の賜物」と呼ぶ。
- ② 5節 御霊の賜物が与えられる目的は、信者がその賜物を用いていろいろな奉仕をするためである。そして、奉仕にはいろいろあるが、仕える相手は主（イエス・キリスト）である。
- ③ 6節 御霊の賜物による働きはいろいろあるが、父なる神がすべての人の中で、すべての働きをする。信者の人間的な力による働きではない。
- ④ 7節 御霊の賜物によって働くと、その結果は、教会の皆の益となる。皆の益となるために、信者一人ひとりに御霊の現れが与えられている。

(4) 8～11a節 御霊の賜物の種類（全部で19ある、8ページに【参考資料】）

- ① 8節 知恵のことば、知識のことば
- ② 9節 信仰、癒やしの賜物
- ③ 10節 奇跡を行う力、預言、霊を見分ける力、種々の異言、異言を解き明かす力
- ④ 11節 a 種類はこのようにいろいろあるが、同じ一つの御霊がこれらすべてのことをなさる。

(5) 11b～31a節 御霊の賜物と教会の関係

- ① 11節 御霊は、みこころのままに、一人ひとり、それぞれに賜物を分け与えてくださる。
- ② 12～22節 からだが一つでも、多くの部分があるように、キリストもそれと同様である。→ 教会は、キリストのからだ、かしらはキリスト、信者一人

ひとはからだを構成する各部分である。

- ③ 23～27節 私たちは、からだの中で見栄えがほかより劣っていると思う部分を見栄えをよくするものでおおう。こうして、見苦しい部分はもっと良い格好になるが、格好の良い部分はその必要がない。神は、劣ったところには、見栄えをよくするものを与えて、からだを組み合わせられた。
- 御霊の賜物を与えられたのは、劣ったところに、である
 - 賜物を受けた信者は、自分を誇ることはできない
- ④ 28～31a節 神は教会の中に、5つのランクの賜物を備えてくださった。第一に使徒たち、第二に預言者たち、第三に教師たち、そして（第四に）力あるわざ、そして（第五に）癒やしの賜物、援助、管理、種々の異言。信者たちは、よりすぐれた賜物を熱心に求めるべきである。

2. 12:31b～14:1a 御霊の賜物よりはるかにまさる道：愛を追い求める

3. 14:1b～14:33a 異言と預言の比較

(1) 1節 結論

- ① 異言よりも預言を求める・・・1節「御霊の賜物、特に預言することを熱心に求めなさい」、39～40節「ですから、兄弟たち、預言することを熱心に求めなさい。また異言で語ることを禁じてはいけません。ただ、すべてのことを適切に、秩序正しく行いなさい」
- ② 【注意】「預言を求めよ」という勧めは、現代には当てはまらない。現代は、使徒と預言者の賜物は終了している。
- コリント人への手紙が書かれた頃は、まだ預言者がいた時期。
 - 使徒ヨハネが受け取った啓示が黙示録として書かれ、新約聖書が完成した時点で、預言者の働きはいったん終了した。その後は、使徒たちと預言者たちの基礎の上に、教会が建て上げられており、現代に至る。
 - 将来、預言者が立つのは、時期としては大患難期の前半、場所はエルサレム、「二人の証人」として、二人のユダヤ人が登場する。
 - よって、「預言を求めなさい」というコリント人への手紙の勧めは、黙示録が書かれるまでの教会に対する勧めであって、現代の私たちに適用されるものではない。
- ③ 現代の私たちに求められること・・・黙示録をもって完結した新約聖書の預言のことばに対して、黙 22:18～19、「つけ加える」ことも「何かを取り除く」こともせず、黙 1:3、「この預言のことばを朗読する」こと、「それを聞いて、そこに書かれていることを守る」ことである。

- (2) 14:2~4 異言と預言のそれぞれの特徴
- ① 2節 異言は、人に向かって語るのではなく、神に向かって語る。だれも理解できないが、自分の霊によって奥義を語る。(語るのは、御霊ご自身ではない)
 - ② 3節 預言は、人に向かって話す。その内容は、人を育てることばや勧めや慰めである。
 - ③ 4節 異言は、自らを成長させ、預言は、教会を成長させる。
- (3) 14:5 異言と預言との優劣比較
- ① 14:5 パウロは、コリント人の教会の信者たちみなが異言で語ることを願うが、それ以上に願うのは、信者たちが預言することである。
 - ② 14:5 教会を成長させるという点で、異言よりも預言がまさっている。
 - ③ 14:5 異言が教会の成長に役立つためには、異言で語る人がその解き明かしをする必要がある。
- (4) 14:6~28 異言を語る時の注意点
- ① 13節 異言で語る人は、それを解き明かすことができるように祈る
 - ② 14~15節 「もし、私が異言で祈るなら、私の霊は祈るが、私の知性は実を結ばない。そこで、どうしたらよいのか。」→ 霊で祈るなら(異言で祈るなら)、次には、知性でも祈る。異言の祈りと知性での祈りのバランスが必要
 - ③ 26~28節 信者たちが集まったところで、「異言を話したり、解き明かすこと」はしてもよいが、そのすべてのことを、教会の成長に役立てるためにする。だれかが異言で語るなら、二人か、多くても三人で順番に行い、一人が解き明かしをする。解き明かす者がいなければ、教会では黙っていて、「自分に対し、また神に対して語る」ところに、とどめておく。
- (5) 14:29~33a 預言をする(啓示を告げる)時の注意点
- ① 二人か三人が語り、ほかの者はそれを吟味する。
 - ② 席に着いている別の人に啓示が与えられたら、先に語っていた人は黙る
 - ③ だれでも学び、誰でも励ましが受けられるように、だれでも一人ずつ預言することができる
 - ④ 預言する者たちの霊は、預言する者たちに従う。神は混乱の神ではなく、平和の神である
4. 14:33b~38 集会において秩序を保つことについて
5. 結論:39~40節「ですから、兄弟たち、預言することを熱心に求めなさい。また異言で語ることを禁じてはいけません。ただ、すべてのことを適切に、秩序正しく行いなさい」

□「聖霊の賜物」(フルクテンバウム博士「The Gifts of The Holy Spirit」に基づく)

1. 3つのポイント (Iペテロ4:10)

- (1) それぞれが賜物を受けているのですから・・・すべての信者が、少なくとも一つの賜物を与えられている
- (2) その賜物を用いて互いに仕え合いなさい・・・聖霊の賜物は、**the Body**「みからだ」(キリストのからだ、目に見えない普遍的なひとつの教会)の中で、それを建て上げるために用いられるものである
- (3) 神の様々な恵みの良い管理者として・・・信者は、神から授かった賜物を、謙遜に忠実に活用する責任を負っている。

2. 聖霊の賜物には、重要度に応じて5つの順位がある。賜物は全部で19

重要度に応じて5つの順位		賜物は全部で19			数
Iコリ12:27~31		ロマ12:6~8	エペソ4:11	Iコリ12:7~11	
第一	使徒たち		使徒		1
第二	預言者たち	預言	預言者	預言	1
第三	教師たち	教える 勧める	伝道者 牧師・教師	知恵のことば 知識のことば 霊を見分ける力	7
第四	力あるわざ(奇跡)			奇跡を行う力 信仰	2
第五	癒やしの賜物			癒やしの賜物	1
	援助	分け与える 慈善を行う			2
	管理	指導する 奉仕する			2
	種々の異言			種々の異言 異言を解き明かす力	2

Iコリ7:1,7	
独身の賜物	1

合計 19

3. 「使徒の賜物」と「預言の賜物」は終了している
 - (1) 教会は、使徒たちと預言者たちという土台の上に建てられている。土台はすでに据えられているということは、教会時代の使徒たちや預言者たちはすでに登場し、その働きを終了したということ（エペソ 2 : 19~22）
 - (2) 旧約聖書では知られていなかったことで、新約聖書で初めて明らかにされたこと、それが奥義である。奥義は、使徒たちと預言者たちに啓示された。この啓示は新約聖書に記録されている（エペソ 3 : 1~9）。
 - (3) 私たち、教会の信者たちは、使徒たちによってひとたび伝えられた信仰を守らねばならない（ユダ 3 節）。「ひとたび」とは、1回で完全に、という意味である。新約聖書の啓示は完成している。もはや、新しい啓示はない。現代において、教会のために、神が使徒や預言者を遣わすことはない。

4. 聖霊の賜物を用いる目的（エペソ 4 : 11~14）
 - (1) 12 節 みからだを建てあげる
 - (2) 13 節 そのゴールは、私たちがみな、霊的に成長して、キリストの満ち満ちた身丈にまで達すること
 - (3) 14 節 抑止的な目的もある。人の悪だくみや人を欺く悪賢い策略から出た、どんな教えの風にも、吹き回されたり、もてあそばれたりすることがないように。

5. 聖霊の賜物は、信者が「おとなになっていく」=成熟のための手段である（エペソ 4 : 15~16）
 - (1) 15 節 愛をもって真理を語ると、かしらであるキリストに向かって成長する
 - 「真理」とは、イエスがメシアであるということ。神が人となられたお方であること。父なる神がイエスを遣わしたということ。・・・
 - (2) 16 節 それぞれの部分がその分の応じて働くと、成長する

6. 自分の賜物を見出すには
 - (1) I コリ 12 : 1 知る : 聖霊の賜物とは何であるかを聖書から学ぶ。
 - (2) I コリ 12 : 5、エペソ 4 : 12 奉仕する : 地域教会に属して、何らかの働きをする。その作用を観察して、皆の益となっていれば、賜物である。
 - (3) I コリ 12 : 31 求める : 他の賜物を発見する、信者にはひとつだけでなく、二つ以上の賜物が与えられていることがあることを前提に、奉仕に取り組む。ひとつの奉仕だけでなく、他の奉仕にも参加してみるとよい。